

幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟
会報 No.60

令和2年9月30日

コロナ禍の早い終息を願う



会長 馬場 洋一

えています。本号が発行される時期もまだ先行き不透明な状況が続いていると思われます。

この影響は大きく、令和2年は横浜能楽連盟にとっても「受難」の年となっています。会員の多くが発症率が高く重症化するとされる高齢者であり、安全・安心に開催できないという理由から、3月14日に開催予定だった「第23回五流交流のつどい」を直前に中止いたしました。それを決定する理事会自体も一堂に会しての開催ができず、メールによる審議とせざるを得ませんでした。

また、定時総会も書面による総会に切り替え、会員から委任状を提出していただいて理事会が決議する方法を採りました。審議結果については、HP上に設けた会員専用ページから、パ

スワードの入力により閲覧していただくようにしました。

さらに、10月17日に開催予定だった「第36回横浜五流能楽大会」も、番組まで完成していたものの、会員の健康を守るための苦渋の決断をして、7月6日に中止を決定しました。横浜能楽堂との共催で6月6日開催予定だった「第68回横浜能」も中止となり、これで連盟の3つの主催事業がすべて中止となったわけです。

その間、各流派・社中の方々は「ウチの流派の会も中止になった」「そもそも稽古ができない」という声を多く聞かれました。公的な施設の閉館によって稽古する場所が確保できず、ようやく開館しても大きな声を出す歌唱等の利用はできないと制限が付く有様です。こうなると「STAY HOME」で稽古をするしかないというのが、ほとんどの会員の実情ではないでしょうか。ところが、お叱りを覚悟で申し上げると、目標が無いと稽古に力が入らないという、哀しい人間の性が頭をもたげてきます。しかもウイルスという目に見えない「敵」に対して我々にはできることは、マスク着用、手指消毒、外出自粛、三密回避による予防のみ。これが「新しい生活様式」とし

て定着するということは、「お稽古やめなさい」と同等の意味を持つのではないかとさえ思えてしまいます。ワクチンや治療薬が開発され、世界中に行き渡るまで待たねばならないのかと思うと、何とも無力感を感じます。

けれど、振り返れば、当連盟が結成されたのは昭和23(1948)年、戦後の混乱期でした。戦災からの復興半ば、数々の施設を進駐軍に占領され、たままの横浜で、先人たちは「横浜で能楽愛好家の組織を」という目標を持ち、それを原動力として現在の連盟の基礎を作ったのです。「コロナ」で混乱する私たちの現状と重ねると、過酷

な状況下で明るい目標を持ち得た先人たちの偉大さに、改めて思い至ります。

世界の歴史を顧みても、人類は何度もコレラ・ペストなどのパンデミックを経験し、医学の力で乗り越えてきました。日本においても疫病の流行が何度もありました。疫病も戦争も乗り越えて、能楽は600年以上継承されてきたのです。そう考えれば、この「コロナ」もきつと乗り越えられるはずで、コロナ禍が終息し、何の心配もなく稽古できるようになり、皆が集い、握手をし、語り合い、日頃の成果を披露できる日が来ることを楽しみにしたいと思います。

連盟事業報告(令和元年度)

副会長 青山 圭佑

一、定期総会

平成31年4月23日(月)、総会が横浜能楽堂旧レストランにて開催されました。出席会員及び委任状の総数にて総会は成立し、平成30年度の活動報告・会計報告が行われ、承認されました。続いて、令和元年度の活動計画・予算案が提示・説明され、共に承認されました。

役員の改選は、2年任期の中間に当たるため行われませんでした。

したが、金剛流の倉藤事務局長が会長の指名により副会長兼事務局長に就任し、また、理事の補充として、宝生流1名・観世流2名が承認され、紹介されました。

なお、令和2年度の総会は、コロナウイルス対策による三密を避けるため、会長及び事務局のご苦勞により、書面による総会となりました。会員の委任を得て理事による書面での承認と

いう異例の形式で、役員改選を含めて決定されました。

二、大会の開催

「第35回横浜五流能楽大会」は、当初令和元年10月12日（土）に開催予定でしたが、台風19号の影響で11月16日（土）に延期して開催されました。日程変更により、出演できない社中もありました。大会の詳細は、当幽玄59号に担当流派の観世流梅若会により報告されております。

「第23回五流交流のつづき」は令和2年3月14日（土）開催予定で、担当流派の金剛流によつて番組の配布まで進行していましたが、憎つきコロナウイルスにより中止せざるを得ませんでした。また、10月17日（土）の「第36回五流能楽大会」も中止に追い込まれています。

三、「第67回横浜能」

令和元年6月29日（土）、横浜能楽堂と横浜能楽連盟との共同主催により開催されました。金剛流・豊嶋彌左衛門（三千春改め）による能「隅田川」及び狂言「箕被」（和泉流・野村万作）で、入場券468枚発売、来場率93.2%と盛況に終わりました。

なお、令和2年度6月開催予定だった「第68回横浜能」は、これまたコロナウイルス対策のため中止となっています。

四、会員の動向

会員の動向につきましては、令和2年度の総会及び理事会が開催不可能となり、資料の確認ができないため、次回改めて報告いたします。

つづき謡曲会の活動状況

観世流 伊丹 邦彦

本稿を書いている今、新型コロナウイルス感染者が急増し、医療施設の逼迫が叫ばれています。この環境下での玄人の先生方の活動ご努力には、全く頭の下がる思いです。

さて、昨今私の周囲では、高齢化の進行と共に謡の仲間が減ってきており、活動に制約が生じるとの声を聞くことがあります。当能楽連盟では、約5年前に会員の減少傾向に歯止めをかけ、増加に転ずることを目的として、「会員増強のための意見書」がまとめられ、次の具体策が順次実行に移されています。

すなわち、能楽連盟の広報活動強化のため会員の活動状況を幽玄に掲載、横浜市等の地方自治体誌に連盟の活動記事を掲載、連盟のホームページ開設、ホームページに加入団体の活動状況を掲載、能楽大会等のパン

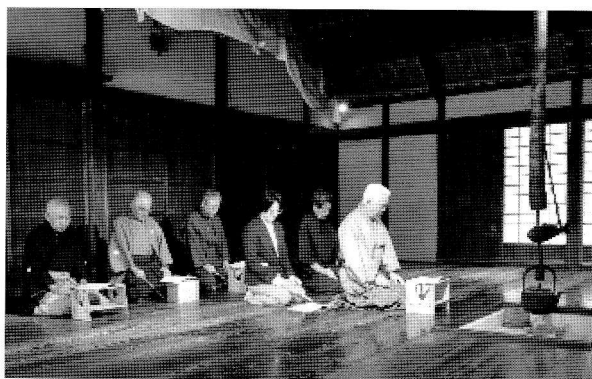
フレットやポスターを地区センター等に掲示、及び育成会員制度の創設等で、これらは未着手のものもありますが、本稿では、この中の「会員の活動を幽玄に掲載」に対応して、私が所属するつづき謡曲会の活動状況をご紹介します。

当会はホームページ（<http://u-tuduki.com/>）も開設しておりますが、そこに掲載されているように、平成8年9月に、能楽普及のために現理事である長谷川武雄により創立された観世流謡曲同好会です。

稽古は、都筑区の地区センターにおいて、月2回土曜日午後の2時間程度です。加えて未経験者強化研修を、会員の指導で毎回2時間行っています。この定例の稽古に加え、会の主たる活動としては、正月の謡始め、春秋2回の横浜能楽連盟主催の大会参加、都筑民家園の「古典芸能に親しもう」への参加、地区センター祭りへの参加等が挙げられます。都筑民家園での謡会では、國學院大學観世会の学生さんによる若々しい仕舞を披露いただいております。ご来見の皆さんから好評です。

最後に、当会の未経験者強化研修についてご紹介します。この研修は謡曲「鶴亀」に因んで「鶴と亀の会」と名付けられ、

▲平成31年の民家園での謡会（5月開催なので天井に鯉のぼりが飾られています）



謡曲の稽古

観世流梅若会 吉丸 朝久

私が謡曲の稽古を始めたのは50年ほど前からです。東芝に入社して数年が経った頃、同じ課の人から、「謡曲の稽古を始めたいが、一人だと気が引けるので一緒にやりませんか？」と誘われたのがきっかけとなりました。特に謡を習いたいと思っていただけではありませんが、小さい頃、父が近所の人達に謡の手ほどきをしていたのを聞いていたので、幾らか興味はありました。

私は九州佐賀の片田舎で育ちましたが、当時は結婚式などの祝の席では、謡の一つや二つはいつでも披露できるのが大人の嗜みだと考えられていたようです。父は小学校や中学校の校長を長く勤めていたので、必要に迫られて稽古したのだらうと思います。

最初の稽古は、新人3名に対して工場の先輩から週に1度、昼休みに30分程度の稽古をしてもらいました。1、2行ごとに指導してもらい、訳も分からず、夢中で真似をしていたのを思い出します。更に、東芝で観世流を習っている人達の会「梅鶯会」が月に1度開かれていたので、

ここにも参加するようになりま

した。ここでは、日曜の午後を使って、5曲の素謡が行われます。最初は地謡だけに参加させてもらいましたが、5曲も通して謡えば種々の場面が出てきます。ここで強吟、弱吟の発声法、

拍子合・拍子不合の謡い方、間の取り方などを勉強させてもらいました。先輩からも「梅鶯会に出るようになって、急に謡が良くなりましたね」と褒められたのを覚えています。少し無理でも、上手な人達と一緒に連吟するのは、上達の早道だと感じました。

私は工場で電子機器の開発を担当していたのですが、その後高度成長と共に猛烈に忙しくなり、いつしか謡曲の稽古から遠ざかってしまい、工場での稽古もさびれてしまいました。しかし、10年経った頃に工場の先輩が見えられ、稽古を再び始めるよう強く勧められたので、再開することになりました。今度は東芝の大先輩で師範の免状を持つておられる方が先生で、月に2度工場に見えられ、終業後に和室で正座しながらの稽古となりました。生徒は工場関係の10名程でしたが、習熟度によって上・中・下の3組に分かれ、私は中に属して本格的に稽古を始めました。ここでは、姿勢の保ち方、呼吸の仕方、発声法、

表現法など基本的なことをしっかり指導してもらい、また難しい曲でも稽古をすれば何かを得られるとの考えのもと、色々な曲を教えてもらいました。

仕事のほうは相変らず忙しくて、開発がうまくいかないときや会議が紛糾したときなど、頭がじんじんして腰が痛くなったりしますが、先生の前で正座して30分程の稽古をすると、いつの間にか良くなっているのです。頭は、左脳（仕事関連）と右脳（芸術感情関連）をバランス良く使うと体調も良くなると稽古の効能を感じたものです。

私が初めて正規の能舞台に立ったのは川崎の能楽堂で、まだ出来てすぐの頃です。本格的に稽古を始めた頃で、梅鶯会の一員として「鉢木」のワキツレを務めました。シテ・ツレ・ワキは全てベテランの先輩達で、皆無本で行うので君も無本にしなさいと言われ驚きました。ワキツレは少しだけなので大丈夫だろうと思い引き受けました。「鉢木」は1時間を超す大曲なのを無本で通すのは大変な努力だろうと感心したものです。この時、能舞台の音響効果の良さにも感動しました。

古と発表会への参加は続けました。会社勤めを終えてからは、時間も出来たのでプロの先生に習いたいと思い、加藤眞悟先生（梅若万三郎一門で準職分）に弟子入りました。加藤先生からは、現在も素謡・仕舞・舞囃子の稽古を月2回していたにいます。拍子の取り方・発声法・表現法・気合など細かい点まで指導してもらい、伝統芸能としての謡曲の奥深さを感じながら稽古をしています。今は80歳を大分過ぎ、どこまで続けられるかわかりませんが、一生の大きな趣味として謡曲の稽古を続けたいと思っています。

さらに10年を目指して

金春流 鈴木 健

私にとって、今や謡・仕舞、お茶、そして合唱のない生活は考えられません。それが新型コロナの影響で、稽古・練習が3か月もストップしてしまいました。やっと稽古・練習が再開されても、まだまだ手探りの状態です。ことに、横浜能楽連盟に入会後毎年度参加している、秋の五流能楽大会が中止になってしまったのはとても残念です。

会社生活も定年まで先が見え少し時間的な余裕もできた頃、定年退職後10年を充実したものと

にするにはどうするかと考え始めたのです。そんな中で、日本人でありながら日本の伝統文化については何も知らないことに気づき、何がいかと探していました。そんな時に出会ったのが、日経新聞社主催の能の公演でした。初めての能は、眠くなるし、なんだかよく解らないうちに終わってしまいました。それでもなにか感じるところがあつたのでしょうか、その後何度か能楽堂へ足を運ぶようになりました。

そうこうしている間に、能の事をもっと知りたいと思うようになり、そして出会ったのが、現在の師である金春流シテ方能楽師、山井綱雄先生の講座でした。お若いながら話し上手で、いろんなエピソードを交えて曲ごとの見所聞き所を話してくださいました。また、謡や仕舞の一部を体験させていただきました。それを何度か繰り返すうちに、謡・仕舞を本格的にやってみたいと思い、山井先生に伺うと、講座とは別に教室を持たれていると聞き、入らせていただくことにしました。

こうして素人弟子として入門させていただいたのが、6年前の4月でした。それ以来、社中の発表会や、金春流の各先生方の素人弟子全体の発表会で、仕

舞や舞囃子をやらせていただけてきました。いつかは能を演じるとというのが、今の目標となっています。

お茶との出会いも、日経新聞です。ある日の夕刊で裏千家の初心者向け教室が開かれるのを知って申し込み、教室終了後そのまま先生に入門しました。また、合唱は謡の大先輩の紹介で始めました。機会というのは、自分から求めていないと見過ごしてしまうようです。また、出会いにもいろいろ不思議な縁を感じます。

まもなく定年退職後10年を迎えます。毎年、あと10年と思つてやってきました。いつまでたつても、「あと10年」を目指していかたいいなと思っています。

今、能楽界は（能楽界だけではありませんが）大変な時を迎えています。微力ながら、何かお役に立てる事はないかと考えています。

謡曲との出会い

下懸宝生流 小林 恵子

今から12年程前になります。自治会の役員会で、藤田先生に「謡曲を始めませんか？」と誘われました。謡曲は、結婚式で「高砂」を聞いたことがあ

るくらいで、当時はどのようなものかわかりませんでした。音痴で人の前で歌うことは恥ずかしくてできませんと言うと、先生は、謡曲には音痴はありません、カラオケも上手になりますと言われました。母の介護も終わって自分の時間もできましたし、声を出すのは健康に良いのではと思って、峰謡会に入会いたしました。

いざ始めてみると、声がよく出ず、息が続けません。先生に声の出し方をお尋ねしますと、丹田から声を出す意識を持つとよいのではとのことでした。そこで、長年取り組んでいる太極拳の呼吸法を試してみると、声に伸びとハリが出始めました。一人で練習している時は、声が上ずったり、音程が気になったりしてしまいましたが、お稽古の時に皆さんと声が揃うと、とても良い気持ちになります。

初めてのお役は、平成27年の「横浜五流交流のつどい」での「杜若」のシテでした。75歳の初舞台でした。大会間近になると、家事をしている時も交差点の信号を待っている時も、「杜若」を頭の中で繰り返し謡っていました。当日は緊張して、舞台がとても長く感じましたが、終わった後は達成感で胸がいっぱいでした。小さい頃から

その他大勢の経験しかなかった私にとつては、役を演じるということは大変貴重な体験となりました。

数年前、京都を訪れた際、天竜寺裏の竹林を散策中に、「野宮」の黒木の鳥居に出会いました。暫く眺めているうちに、六百年前に思いを馳せることができ、「野宮」を謡うイメージ

が湧いてきました。それからは、謡曲に関連のある場所を訪ね歩く旅の楽しみができました。現在のお稽古曲は「羽衣」で

2回目になります。今回藤田先生からいただいた「羽衣」謡方の手引きの「ある場面の全体の謡方や情景を理解することが基本になります」を参考に練習していますと、漁夫の立居振舞、

美保の松原、天人の羽衣、七宝などを8年前の前回時より身近に思い浮かべることができるようになりました。

コロナの影響で3月と4月はお稽古ができませんでしたが、5月にはスマホのラインを使って個人稽古ができました。6月からは、従来の会場でのお稽古が再開されています。コロナを

能楽堂だより

令和2年10月～3年3月の公演案内

令和2年10月～3年3月までの横浜能楽堂の公演予定は次の通りです。ぜひお運びください。

企画公演「馬場あき子と行く 歌枕の旅」

第1回 10月10日(土) 午後2時開演
能「善知鳥」(観世流) 野村四郎
▽チケット発売中

第2回 11月22日(日) 午後2時開演
能「木賊」(金春流) 櫻間金記
▽チケット発売中

第3回 12月19日(土) 午後2時開演
能「蟬丸」(観世流) 大槻文蔵・浅見真州
▽チケット発売：10月31日(土) より

第4回 3年1月23日(土) 午後2時開演
能「船橋」(宝生流) 金井雄資
▽チケット発売：12月5日(土) より

第5回 3年2月20日(土) 午後2時開演
能「班女」(喜多流) 香川靖嗣
▽チケット発売：3年1月9日(土) より

各公演 S席七千円/A席六千円/B席五千円

特別公演

10月25日(日) 午後2時開演
狂言「靱猿」(大蔵流) 山本東次郎
狂言「茶壺」(大蔵流) 山本則俊

狂言「闇罪人」(大蔵流) 山本則秀
S席五千円/A席四千円/B席三千五百円
▽チケット完売

普及公演「眠くならずに楽しめる能の名曲」
12月12日(土) 午後2時開演
狂言「夷毘沙門」(大蔵流) 善竹隆司
能「小鍛冶 白頭」(金剛流) 金剛龍謹

▽チケット発売：10月17日(土) より
S席四千円/A席三千五百円/B席三千円
普及公演「バリアフリー能」

3年3月20日(土) 午後2時開演
狂言「樋の酒」(和泉流) 三宅右近
能「清経 替之型」(観世流) 武田友志

▽チケット発売：3年1月16日(土) より
S席四千円/A席三千五百円/B席三千円
介助者1名無料

※普及公演「横浜狂言堂」は、毎月第2日曜日開催。狂言2番を解説付きでお送りしています。

※普及公演「横浜狂言堂」は、毎月第2日曜日開催。狂言2番を解説付きでお送りしています。

※「横浜狂言堂」150回記念特別普及公演「家×家 交流狂言」は、3年の1月30日(土)・2月6日(土)に変更となりました。

※なお、チケット発売の初日はWEB予約先行で午前10時～11時30分、電話予約は正午より。

窓口販売は翌日からとなります。

横浜能楽堂 ☎045(263)3055

※今後の新型コロナウイルスの感染状況や政府方針によつては、日程・内容等が変更になる場合がございます。最新の情報は、横浜能楽堂ホームページをご確認ください。

横浜能楽連盟連絡先

◎事務局 倉藤
TEL
〇四五・八三五・二三六一